

2011年6月17日～20日（第2回）

2011年7月8日～10日（第3回）

長野県北部(栄村)震災被災地における 文化財保全活動(第2・3回)報告

[2011年7月15日版]



地域史料保全有志の会
代表 白水 智

【 目 次 】

はじめに	2
1. 第2回活動の基本データ	2
2. 第2回活動の内容と成果	3
3. 第2回活動の特徴	4
4. 第3回活動の基本データと概況	6
5. 第3回活動の内容と成果	7
6. 第2回以降の持参品・準備品	9
第2・3回の活動対象地(地図)	10

はじめに

東北地方太平洋沖を震源とする東日本大震災が発生してから13時間後、長野県北部を震源とする大震災が発生し、これによって同県栄村は大きな被害を被った。

その後、当地の生活が多少とも落ち着きを見せてきた4月末から5月初めの時期にかけて、長年栄村の史料調査でお世話になってきた仲間とともに、被災史料の保全活動のために現地に入った。詳細は第1回保全活動の報告書に譲るが、このときには森地区のH h家土蔵内部で散乱した什器類の片付けを中心に、その他4件の史料保全活動を行った。

6月になると、罹災証明の発行に基づく公費での建物の取り壊しが本格化し始めた。被災して使用できなくなり、あるいはこれを機会に修繕せずに解体しようという古い建物が多数に上ったが、その中には民具・古文書などの文化財があるであろうと目されていた個人宅がいくつも含まれており、第2回の文化財保全活動を行う必要が生じた。

第1回の活動後、神戸や新潟の史料ネットワーク組織からボランティア活動にあたるための支援金をお寄せいただいたが、その際に栄村での文化財保全活動チームの名称を「地域史料保全有志の会」とすることにした。そして、前回よりも広範囲に及ぶ方々のご協力を得て、当会として第2回の文化財保全活動を行うことになった。

以下、2011年6月17日(金)～20日(月)と7月8日(金)～10日(日)まで行った活動の内容を報告したい。

なお、当会は固定的な会員を有する組織ではない。「地域史料保全有志の会」の名称は、活動の都度参加される方々全体の、いわばチーム名とご理解いただきたい。また、文化財所蔵者の名称については、イニシャル(姓を大文字・名を小文字)で表記することにする。



全壊した青倉地区公民館



激しく被災し、傾いた土蔵

1. 第2回活動の基本データ

期 間：2011年6月17日(金)～20日(月)の4日間

参加者：白水 智・萬井良大・大橋克己・石野律子・柳澤 誠

・松浦瑛士・保科文俊・前嶋 敏・板垣貴志・吉原大志・近藤浩二・大槻和正・鈴木 努・田邊 幹・原田和彦・細井雄次郎・宮澤崇士・森島一貴・荒垣恒明・(現地での協力)山上宏晃

日 程：17日…栄村教育委員会において、現地関係者と地域史料保全有志の会との打ち合わせ

18日…教委の民具保管庫の見学と民具整理についてのアドバイス。I o家・S ya家・S b家・H y家・S yo家・T ma家・T mi家での保全



活動初日の打ち合わせ風景



民具保管庫の確認

活動

19日…Io家・Kr家・Hk家・Kr家・Hs家・
Hh家土蔵での保全活動。

20日…Hh家・St家・Sh家・Km家・Sh家での保全活動。ならびにSf家への連絡依頼。

2. 第2回活動の内容と成果

具体的な活動内容としては、古文書や書籍、民具等文化財の有無を確認し、それらがある場合には現状記録をとることを基本とした。現状記録は所定の現状記録カード(筆者が通常の調査時に利用しているもの)を利用し、また所蔵先ごとの調査内容を「史料調査記録カード」(これも通常調査時に利用)にまとめた。

また、それら文化財を所蔵者が不要品として廃棄する意向である場合には、抽出した文化財を引き取り、確保したスペースに運搬する業務も必要となった。

抽出の基準であるが、民具に関しては、Hh家土蔵内のものの(年紀の判明するものを含む大量の器物を土蔵に残し、栄村での民具収集の規準になると考えられる)を、傷みやすく虫などのつきやすい布団類は除いて原則全て保存とした。他家の民具は、それと比較して特異なもの、あるいはそこに含まれていないものを中心に選択する方針を定めた。文献史料に関しては、他でも閲覧が可能と考えられる近現代の活字刊行書籍類と昭和40年代以降の学習ノート等を除き、他は原則として抽出することにした。ただ、現場の状況によっては必ずしもこれに合わないものも抽出したり除いたりする場合があった。

Hh家土蔵内の器物については、2004年に行った調査である程度の図面と記号番号付けは終えていたが、今回移送の準備として、すべての器物に詳細な番号札を付ける作業を開始した。これは作業終了日までに終えることができなかつたため、今後継続して作業を続けなければならない。

激しく損壊したIo家の土蔵が今回扱った文化財の中では大物であった。土蔵は全体が傾いたほか、一部の垂木が外れて2階におちてきており、それが1階との出入り口を半分塞いでいた。さらに2階の床の一部が大きくたわみ、1階へ崩れそうな状態にもなっていた。この土蔵には多数の民具と史料が残されており、土蔵の早期解体に向けて、それらを搬出する必要が生じた。結果的に、民具は軽トラックで10回ほど往復して前述の個人宅の別棟ガレージに運んだほか、史料についても、木箱30箱ほどに及ぶ量を個人宅母屋の1階部分のガレージに運搬した。



民具整理有志の方へのアドバイス



次々に出てくる民具



垂木が外れて落ちたIo家土蔵



1階に下がっている2階の床

この他にもK r家・T h家などからも民具の搬出を行い、また損壊した土蔵から同じ所有者の別の倉庫に民具を移動するなどの作業を行った。さらに、当面取り壊し予定がなく、同じ場所で保存可能と判断された民具や史料については、所在確認をし、あるいは現状記録をとって今後の情報とした。

3. 第2回活動の特徴

今回の活動の特徴について、前回との相違点を軸に挙げていきたい。主に以下の6点が挙げられる。

- ①初めて民具に関する専門家との共同調査が実現したこと。
- ②調査先データを事前に受け取り、利用できしたこと。
- ③取り壊し予定の土蔵や家屋から民具や史料を実際に運び出したこと。
- ④初対面の多数の方にご参加いただき、その方々の専門に応じて適宜調査チームを編成し、各文化財所蔵者宅をまわったこと。
- ⑤各方面からの参加者への一括連絡の方法として、WEB上の掲示板(BBS)を利用したこと。
- ⑥神戸・新潟などの史料ネットワークから活動支援金をお寄せいただいたこと。

①民具専門家との協働

筆者は10年以上に亘り栄村で史料調査を行ってきたが、調査の過程で多数の民具を見出す機会がありながら、これまで一度も民具調査の専門家の方とご一緒したことはなかった。2004年に実施したH h家の土蔵調査の際には多数の膳椀や皿・茶碗などの実用什器を見出したものの、その価値が専門家ではない筆者にはわからず、2007年に「民具としての什器の価値はーある民家の土蔵まるごと調査からー」と題する文章を書いて広く専門家のお知恵を借りたいと思ったものの、ほとんど反応は得られなかつた(『民具マンスリー』40巻6号、2007年9月発行)。民具の扱いは長年の懸案であったといえる。

今回の震災においては、多数の土蔵が被災し、取り壊さざるをえないケースも続出している。となれば、現在はほとんど使用されることのない多数の什器類はやり場に困り、結局廃棄されてしまうことが容易に予想された。たまたま今回の保全活動に参加のお誘いをした萬井良大氏が、神奈川大学日本常民文化研究所の客員研究員で多数の民具調査の実績をお持ちの石野律子氏に声をかけて下さったため、今回の民具調査が実現した。石野氏からは民具調査経験のある大学院生に参加を呼びかけていただいたほか、長野・新潟・富山などの博物館の学芸員で民具に詳しい方がご参加下さったこともあり、文献と民具の両方の調査者がチームを組んで各家に調査に入れることになった。

②調査先データの事前収集

前回の活動においては、以前に調査済みであった土蔵の内



旧家に残された多数の民具



民具専門家による調査



民具の運び出し

部に散乱した器物の片付けを中心としたが、他にも古い土蔵のあるお宅を4件ほど調査した。ただその調査は、地元協力者の方が古い土蔵のあるお宅を飛び込みで回って得た情報をもとにしたもので、網羅的な調査とはいえないかった。

一方、今回の作業にあたっては、事前に教育委員会や役場、それに県立歴史館から取り壊し予定建物の一覧や文化財所在データの一覧をご提供いただくことができた。今回の活動では実質3日間の活動期間に合計17箇所もの個人宅を訪問調査することができたが、それにはこの事前データの果たした役割が大きかった。

③民具・史料の移動

前述のように現在公費による建物の解体が進んでおり、所蔵者によって不要と判断された文化財はそのまま廃棄される場合が多い。こうしたお宅に調査に入った場合、すぐにでも文化財を確保し、いずれかの場所に移動させない限り、それは廃棄に直結することになる。実際に今回こうしたケースが複数件あり、地元の方の協力を得て個人のガレージなどスペースをお借りして緊急避難的に器物を移動させる事態が起きた。行政(教育委員会)にはこうしたケースへの対応をお願いしたものの、担当者から行政としては責任をもちきれないので移動は考えないでほしいと要請されたため、やむをえず緊急時には私の責任において移動を行うことにした。しかし活動期間中にこのような事態が現実化したため、担当者の方も文化財の緊急避難先を探して下さった。ただ、目途をつけていただいた移送先も状況確認が時間的にできず、不確定な要素が多くなったことや移送距離の都合から、以前から知り合いの史料所蔵者宅のガレージを避難先として利用させていただくことになった。今後そこに運び込んだ民具・史料などをどこへ移すのかが課題となっている。

④民具と史学からなるチーム編成

今回の活動においては、相互に初対面の各方面からのボランティアの方々に集まっていたいただき、作業を進めることができた。前回は、これまで多少とも栄村の調査を共にした経験のある仲間で活動を行ったが、それと比べるとメンバー構成に大きな違いがあった。愛媛や神戸など遠隔地からお越しただいた方もおり、また各地の博物館学芸員の方が幾人もご参加下さったことも特徴としてあげられる。内訳としては、大学関係者3名、高専教員1名、博物館学芸員7名、大学院生・聴講生5名、自治体文化財担当者1名、自治体史編纂職員2名、現地関係者1名となる。

今回の活動では、緊急に調査が必要な所蔵者宅の都合が重なり合い、同時に3件のお宅に向かう必要が生じた場合もあった。しかも大抵の所蔵者宅には民具と古文書などの史料が両方残されている。そこで、参加者を大きく史学と民具の両分野に分類し、双方から2、3名ずつが入るチームを編成し、最大3つのチームに編成して各所蔵者宅の調査に入っていただいた。結果的にこの方式は有効に機能したといえる。



民具の移送



民家のガレージに運び入れた民具



旧家から見つかった古文書

⑤ネット掲示板(BBS)の利用

④とも関連するが、多種・多方面からの参加者に対して、もれなく各種の情報を送るのはなかなか困難であった。そこで緊急にBBSを立ち上げることにし、参加者相互の自己紹介、調査予定や集合時間などの告知、参加日程の連絡、準備品の確認や活動方針の伝達等に利用した。またBBSには携帯電話からも書き込み・閲覧ができたため、出発前の相互連絡のみならず、通常のメール環境が利用できなかった現地でも、翌日の調査先や集合時間・場所等の連絡に利用することができた。なお、掲示板では文化財所蔵者宅の個人情報もやりとりされるため、古物商等営利目的の業者等の閲覧を防止するため、簡易なパスワードを設定している。閲覧希望の方は、関係者にパスをお問い合わせいただきたい。掲示板のURLとパスは以下のとおりである。

<http://8200.teacup.com/sakaemura/bbs>

⑥史料ネットワーク等からの支援金

特筆すべき事項として、今回の活動が複数の史料ネットワーク組織や個人からの支援金によって行えたことを挙げておかなくてはならない。以前栄村での調査に参加したことのある神戸大学の板垣氏からの連絡が発端となり、その後神戸の歴史史料ネットワーク(以下史料ネット)や矢田俊文氏を代表とする新潟歴史資料救済ネットワーク(以下新潟ネット)および個人の方から当「地域史料保全有志の会」宛に支援金の振り込みをいただいた。今回の活動にあたっては、交通費・宿泊費・必要資材等の購入資金に充てさせていただくことができた。

ボランティアで参加して下さった方々は休日をつぶし、あるいは仕事の予定を変更して丸1日、多い場合には数日に及ぶ活動をもちろん無償でやって下さった。このうえ現地までの交通費や宿泊の費用まですべて参加者負担にしてしまうのは、あまりに犠牲が大きいし、長期的・継続的な活動を困難にする懸念もあった。その意味で、この支援金を与えられたことは非常に大きな意味があった。資金を援助していただいた組織および個人の方には、この場を借りて深甚の謝意を表したい。



被災しながら文化財を守った土蔵

4. 第3回活動の基本データと概況

期 間：2011年7月8日(金)～10日(日)の3日間

参 加 者：白水 智・柳澤 誠・田邊 幹・細井雄次郎・鈴木 努・荒垣恒明・(現地での協力)山上宏晃

日 程：8日…民具・史料保管候補地の視察と民具移動計画の協議

9日…午前 H h 家土蔵内での器物への荷札つけ

午後 K寺での文化財調査と保存すべき文化財の仕分け

10日…午前 H h 家土蔵内での器物への荷札つけ

午後 Y t 家民具の調査と民具保管庫への運搬

夕方 H h 家土蔵内での器物への荷札つけ

6月には、被災後取り壊しの対象となる土蔵を中心に保全活動を行い、大半のお宅を回ることはできたが、まだいくつかやり残した課題があった。その一つは、夏には移動させなければならないH h 家土蔵内の器物をはじめ、6月調査で応急的に個人宅のガレージなどに避難させた民具類や史料の当

面の保管先を決定することであった。トタン張りのガレージで真夏には温度が相当上昇すると考えられる環境をできるだけ早期に変える必要もあり、8月上旬という目途を立てた民具移動の計画具体化の必要にも迫られていた。H h 家土蔵内民具の荷札付け作業もまだ途中のままであった。他にも取り壊した旧母屋から取り出して庭にシートを掛けて民具を置いてあるお宅があり、その調査も緊急を要した。加えて、ある地区の寺院を解体する話が持ち込まれ、その中の器物や民具を見て欲しいとの話も持ち込まれていた。

前回からわずか2週間余りの間しかおかない活動であったが、早期の現地入りの必要性を感じ、今回は身軽に動ける少人数で週末を利用して栄村に向かった。村外からの参加者は史学5名、民具1名の計6名であった。

5. 第3回活動の内容と成果

(1) 民具・史料の移動計画についての協議

災害時の文化財救出活動に多数の実績をもっている新潟史料ネットの田邊幹氏(新潟県立博物館)が初日に参加され、保管庫の選定に貴重な意見を賜るとともに、民具等移動作業の計画について詳細な提案書類を作成していただいた。これに基づいて参加者で検討し、8月7日(日)・8日(月)の両日に作業を行うことに決定した。

田邊氏からは、必要人員の確保、運搬手段となるトラックの大きさと台数、弁当の手配、休憩場所の確保、作業時間の段取りなど、経験がなければ難しい実際的な課題についても具体的な提案とアドバイスがなされ、協議が進んだ。

(2) 当面の文化財保管先の決定

地元教育委員会から提案していただいた候補施設は4ヶ所あった。活動の初日、教委の方にご案内いただいて、それらをすべて回った。このうち1ヶ所は隣接する飯山市の文化施設内にある古文書収蔵庫で、あとの3ヶ所は村内の個人が所有する施設2ヶ所と村の旧小学校1ヶ所であった。選定の基準となったのは、施設の環境および広さ、物資搬入出の容易さである。

結局のところ、民具に関しては候補3ヶ所のうち個人所有の施設には環境と物資搬入出の点で難点があることがわかり、移送先としては旧小学校校舎に決定した。ここは6月の調査の際に訪ねた民具保管庫であったが、1階部分はある業者が借り受けており、それが撤退するらしいという話はあったものの、6月段階ではまだどうなるかはっきり決まってはいなかった。その後、業者は契約も切れてこの施設は1階部分まで利用できることが明らかとなつた。2階には相当数の民具が雑然と一室に置かれているが、他の部屋もあり、民具整理は2階でも行えると考えられた。広い1階部分は2部屋に区切られていて、かなりの広さがあった。建物は古いが、道路際にあり、搬入出も容易と考えられた。

一方、古文書や古書籍などの史料については、これまで置かれていた土蔵からの大幅な保存環境の変更が悪影響を及ぼす恐れがあり、長期間の保存には懸念がある。そこで8月の民具移動に際しては、収納されている箪笥ごと一旦旧小学校に運ぶものの、その後2ヶ月程度の間に飯山市の施設に移動させる予定となつた。震災後、早い段階で飯山市からはこの施設の利用可能の申し入れがあったという。



民具保管庫1階の状況

飯山市の文化施設が集合している一角にある「いいやまふるさと館」は6年前に建設されたとのことで、その2階には空調や不活性ガスの充填設備を備えた立派な保存室があった。ここを利用させていただくことになったのである。

(3)解体予定の寺院調査

6月の活動後、地元の史料所蔵者の方から寺院調査の話が舞い込んできた。30年ほど無住のこの曹洞宗寺院は、3年前に本尊を初めとする40体以上の仏像や仏具の大半が盜難に遭い、未だ発見されていないという。そのうえ今回の震災でひどく損壊し、今後取り壊す方向で検討しているとのことであった。その前に一度文化財調査をしてほしいとの要請があったのである。

当日は3人の世話人の方が見え、建て付けの悪くなった戸をなんとか開けて中に入った。本堂も庫裡も全て土足でないと上がれない荒れ様であった。文書は古典籍などと共に内陣脇の小部屋にまとまって置かれていた。また須弥壇の裏側からは仏事用の多数の膳椀や御札用の版木やバレンなども見つかった。さらに荒れ果てた庫裡の2階からは農具などの民具や下張り文書のある屏風や襖などが発見された。文書や典籍については現状記録をとり、抽出した民具などと共に保存すべき文化財として、庫裡内の小部屋にまとめて移動した。そして世話役の方々に作業の説明と選定した文化財の保存方をお願いした。世話役の方々は、地域の信仰の核であった寺院が跡形なく消えてしまうことに強い寂しさを感じ、更地になった後も自分たちの寺があったことを物語る文化財を残したいと考えておられた。しかし何を残して何を廃棄すべきか、それが自分たちでは全くわからなかつたといい、我々の活動にたびたび謝意を示された。

(4)個人宅の民具調査と移動

次に旧母屋を取り壊した際に取り出した民具を庭に置いているというYt家をお訪ねした。新宅の前庭には、ブルーシートで覆われた一山の民具が置かれていた。長野市立博物館の細井雄次郎氏にこれを選別していただき、漆器や養蚕用具など軽トラック1杯分の民具を抽出した。そしてYt家の軽トラをお借りして、民具保管庫の1階に運搬した。

(5)Hh家土蔵内器物への荷札付け

前回からの継続作業となっていたHh家土蔵内の民具への荷札付けの作業を継続して行った。1階にまとまっている膳椀の収められた木箱には、購入当初の墨書きのあるものが多数あり、この箱自体が貴重な文化財であるとともに、製作地や購入時期が明らかになる形で残されていることに大きな意味があった。しかし荷札を付けるために紐をかけようと持ち上げると、箱は地震で倒れた影響などで側板や底板が外れているものが多数みられた。土蔵の土壁の崩壊でかぶった埃を払い、中身の膳椀を



荒れ果てた庫裡2階の民具



保存のため抽出した民具と史料



Y家から運び出す民具



壊れた膳椀容器の応急補修

一旦取り出し、箱を細釘などで応急補修した上でまた戻し、紐で括って荷札を付けるという根気のいる作業が続いた。2階では、細かい器物一つ一つに詳細な番号を付け、記録を取りながら荷札を付けていく作業が続いた。

1階は7割程度、2階は9割程度まで進んだが、結局この作業は今回も終えることができず、再び次回に継続することになった。

6. 第2回以降の持参品・準備品

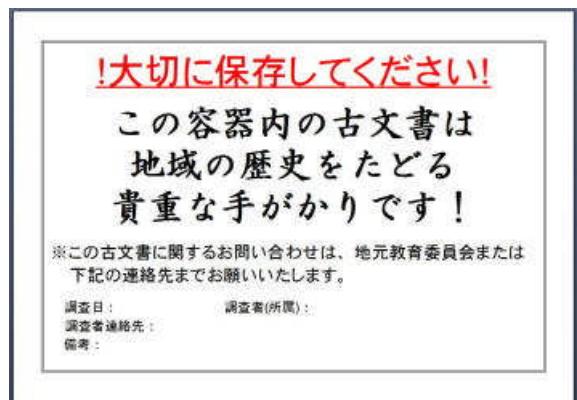
初回の保全活動と同様、史料撮影用のカメラや三脚等の他、電源のない土蔵や家屋内での作業に備えてバッテリーとインバーターとライト一式、充電のための太陽光パネル、LED電球、掃除用具、建物の応急修理に対応するための大工道具なども持参した。第2回は地元の方がガソリン式発電機をご用意くださったが、第3回活動時にはバッテリー・太陽光パネルともに活躍した。また、土蔵内や屋根裏での作業はただでさえ蒸し暑いだけに、発熱温度の低いLED電球は重宝した。

古文書等の文献調査に備えて、現状記録用紙、史料調査記録カード、概要目録用紙などを用意した。さらに、現状記録をとったうえで所蔵者宅にそのまま残される史料がある場合、文化財としての注意を喚起し末永い保存に資するため、貴重な文化財である旨と有志の会代表者の連絡先を記したカード(紙)を容器等に残すことにし、そのための用紙を用意した。

また民具調査に備えて、天然素材の卓上箒、雑巾(タオル)、荷札(針金を外してタコ糸を付けたもの)、タコ糸、スズランテープ、ブルーシート、養生テープ、透明の袋、段ボール箱、民具調査情報カードなどを準備した。

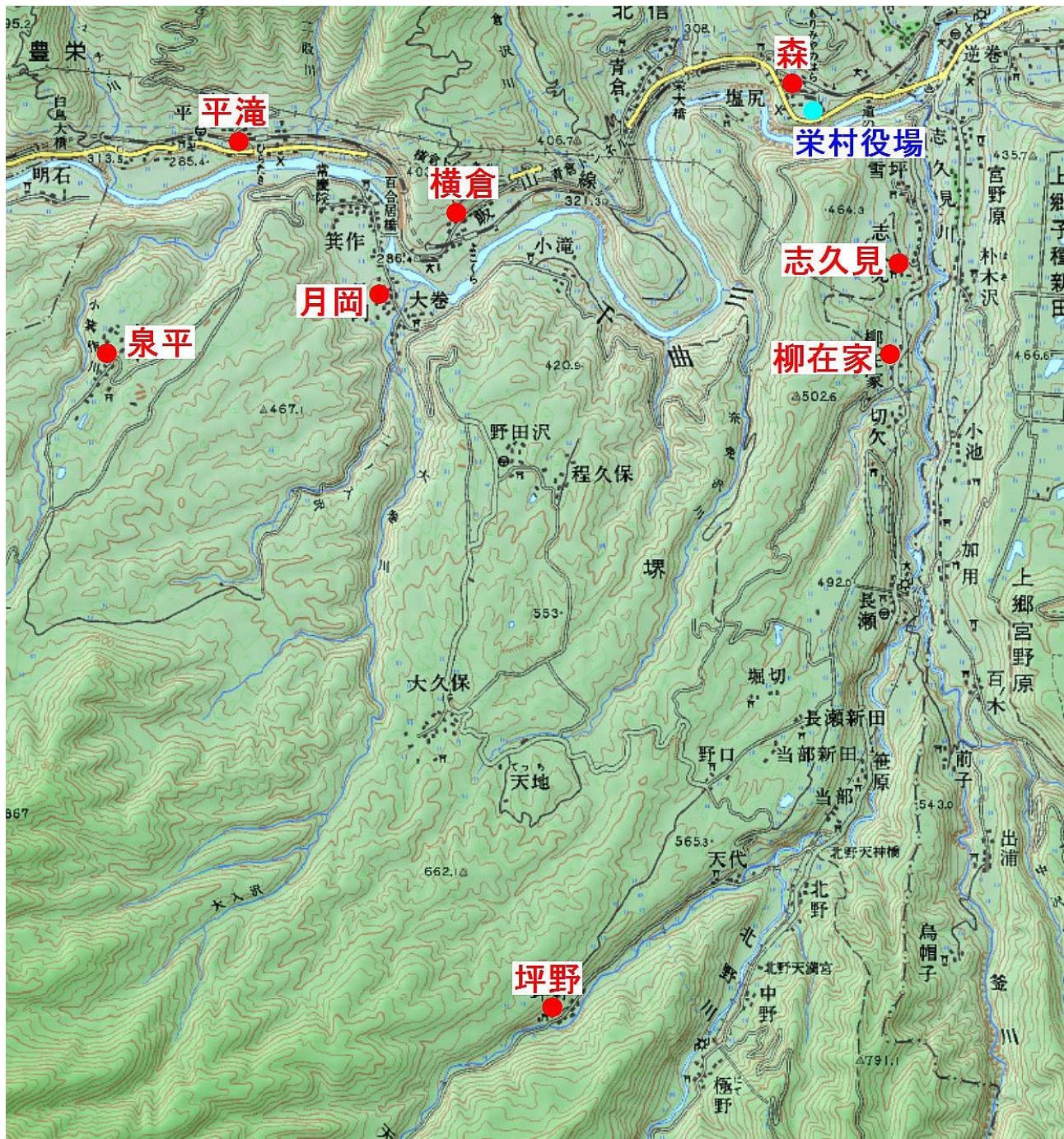
装具では、軍手、作業着、マスク、ヘッドライトについては、参加者各自が用意した。ヘルメットは持参した方以外の分は、村からお借りすることができた。一部の者は釘の踏み抜きに備えての安全靴などを準備した。

また第2回調査の際には、地元教育委員会には、前回同様、教員委員会との連携を示す「文化財調査員 栄村教育委員会」とプリントした身分証代わりのネームホルダーのご用意をお願いした。さらに、地元の方に今回の作業チームの説明をするため、「地域史料保全有志の会」と上部に印字したネームホルダーを用意し、下部にはそれぞれの所属と氏名を書いていただいた。つまり、各調査員は、「地域史料保全有志の会」と栄村の「文化財調査員 栄村教育委員会」の2つのネームホルダーを首から提げて現場に臨んだ。これは調査主体は「有志の会」であり、それが地元教委から支援を受けている、というスタンスを明示するためである。



文化財としての注意喚起のカード

【 第2・3回の活動対象地 】



●は、今回史料保全活動を行った集落